



# ドイツ神話学派の伝説集におけるツヴェルク伝説の配列

馬場, 綾香

---

(Citation)

国際文化学, 31:111-131

(Issue Date)

2018-03-20

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81010140>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010140>



## ドイツ神話学派の伝説集におけるツヴェルク伝説の配列

### A Study on the Classification of Zwergensagen in Narrative Collections by the Mythological School

馬場 綾香  
BABA Ayaka

#### 概要

ドイツ語圏の民間伝承にはツヴェルクとコーボルトという種類の「こびと」が登場する。本稿は両者の学術上の分類について伝説集におけるグループ分けから論じた。グリム兄弟の『ドイツ伝説集』(1816/1818)を皮切りに19世紀ドイツ語圏では伝説集が盛んに編纂された。中でも研究目的に伝承を蒐集したドイツ神話学派の伝説集においては、配列形式とテキストの分類に編者の思想が表れている。グリムの伝説集においてツヴェルクは山に住む精であり人家に住むコーボルトとの差異が明確である。一方後続のドイツ神話学派の伝説集においては両者の境界線がグリムとは異なっており、自然の精霊と見なされたコーボルトはグリムの見解よりツヴェルクに近づき、あるいはツヴェルクの名称を持つ登場人物がコーボルトと判断されている。ツヴェルク伝説グループとコーボルト伝説群に配置されたテキストを比較することでこうした分類基準の変動が判明する。19世紀知識人の視点から見た「こびと」像について明らかにする。

#### キーワード

ドイツ神話学派、伝説、ツヴェルク、コーボルト、エルベ

#### I はじめに

ドイツ語圏の民間伝承に登場する「ツヴェルク」Zwergとは、「低級神話における、体が小さく人間に似た登場人物である。体格、性質、生き方の点で、部分的にはエルフェ、フェアリー、コーボルト、あるいはシュラートといった登場人物との区分が難しい」<sup>1)</sup>とされる。ツヴェルクは小さく人型をとる、即ち一般に「こびと」<sup>2)</sup>と邦訳される登場人物である。しかし、この小さな人型という定義に従えば、上に挙げられた「コーボルト」Koboldも一種の「こびと」であると言える。「フェアリー」fairyは英語、「エルフェ」Elfeはドイツ語及び北欧諸言語における様々な妖精を指すが、ドイツ語圏の民間伝承にこの名称が登場することは非常に稀である。また「シュラート」Schratはドイツ語圏内でも南東部の一部地

域に特化した呼称である。ドイツ語圏の「こびと」伝承について言うなれば、大きな比重を占めるのはツヴェルクとコーボルトの二者であると言える。本稿は殊にこの両者の区分の問題について注視しつつドイツ語圏の「こびと」について論じる。より正確には、コーボルトと称される「こびと」との区分の問題を注視してツヴェルクと称される「こびと」について論じる。以下では概念の定義や混同を問題とするため敢えて「こびと」と訳出せず、原語に従って「ツヴェルク」「コーボルト」等と表記した。

伝承の中のツヴェルクに関する先行研究は、分析対象とするテキストが「民間伝承」であるという前提から出発し、「民間」においてツヴェルクが如何なる役割や意味を持つかという問題を解き明かそうとしてきた。しかし、ツヴェルクとコーボルトとの区分を問題にしようとする場合、この視点のみでは十分に論じることができない。何故ならばツヴェルクやコーボルトの分類を試みるのはこれを研究しようとする学者であるためだ。19世紀ドイツ語圏では民間伝承への関心が高まり、伝説やメルヒェン、歌謡などが蒐集された。中でも学術研究を目的として伝承の蒐集に従事した学者は、現在に至るまで資料価値の高い伝説集を刊行している。こうした動きの中、多数集まった資料を並べて比較分析するために合理的な項目立てと分類が必要となった。<sup>3)</sup>ツヴェルクやコーボルトといった存在の分類について定義を試みたのも、これらの「体が小さく人間に似た登場人物」を学術的に論じようとした知識人層である。この知識人層における意味づけを解釈することで、従来とは異なる視点からみたツヴェルク像を明らかにできるのではないだろうか。

19世紀ドイツ語圏における民間伝承蒐集・研究の礎を築いたのはグリム兄弟(Jacob Grimm 1785-1863, Wilhelm Grimm 1786-1859)であり、その後の研究の進展にはグリムの後継者にあたる「神話学派」Mythologische Schule、ないし「ドイツ神話学派」と呼ばれる一群の研究者の果たした役割が大きい。グリム及び神話学派の研究目的は伝承の中に「神話」の断片を探し出すことであった。民俗学者ヘルマン・パウジンガーはグリム兄弟、特に兄ヤーコプの姿勢を「ヤーコプ・グリムは新しい神話を求めたのではなく、まだ生きている古い神話を掘り復活させることを常に求めていた」<sup>4)</sup>と述べている。グリムに始まった伝承研究はかつて存在したと想定される「神話」の復元を求めており、その「神話」の断片が現存する伝承の中にあると考えて伝承を蒐集していた。こうした研究姿勢は19世紀の主流であった。よって本稿ではグリム兄弟と神話学派におけるツヴェルク伝説の分類について論じる。

従来のツヴェルク研究は主として民俗学の立場に立っていた。このため手法の点でも、ツヴェルクの登場するテキストを伝説集などの文献から切り出して分析対象としてきた。この手法をとる場合、元となった文献は資料集としてのみ扱われることとなる。しかし伝説集という刊行物は単なる資料集に留まるものではない。資料を提示する目的ならば雑誌という媒体もまた各地で発行されていた。<sup>5)</sup>敢えて1冊の本にまとめるという行為には資料提供以上に、編者の表現行為としての意味があったと思われる。

そこで本稿においてはこの伝説集を編者によるひとつの作品と見なし、個々の作品中にツヴェルク伝説がどのように配列されているのかを分析する。テキストの配列は編者による分類を表したものである。知識人は資料を分類する活動を通じてツヴェルクの定義やコーボルトなどとの区分を模索したと考えられる。まずグリムの『ドイツ伝説集』(1816/1818)

の配列からツヴェルク伝説とコーボルト伝説の仕分けについて分析し、次いでドイツ神話学派の伝説集を初期のものから2冊取り上げて、同様に配列からツヴェルク伝説とコーボルト伝説の分類について分析する。グリムと神話学派の伝説集、両者の比較考察を通してグリムのツヴェルク像が如何なる形で弟子に引き継がれたのかを論じることが可能となる。この分析手法によって、19世紀ドイツ語圏の知識人の視点から見たツヴェルク像について明らかにしたい。

## II ツヴェルク伝説に関する先行研究

ドイツ語圏のツヴェルク伝説に関する主だった研究は歴史地理学派ないしフィンランド学派と呼ばれる伝承文学研究の手法によっている。<sup>6)</sup>歴史地理学派の基本となる手法とは、伝承をモチーフと呼ばれる最小単位に分解し、個々のモチーフ毎に多数のサンプルを集めて時系列上と地理上の分布を分析するものである。この方法によってモチーフの起源や伝達と変遷の過程を解明する。

たとえばインナ=マリア・グレッヴェールスの「小さな民の贈り物:KHM182=AT503 比較研究」<sup>7)</sup>(1958)、並びにこれに着想を得た竹原威滋「説話の一生とジャンル変遷—〈世界の瘤取り鬼〉(AT503)をめぐって—」<sup>8)</sup>(2008)が挙げられる。AT503と呼ばれる話型は次のようなモチーフの組み合わせから構成される。(1)旅人が魔女やツヴェルクの踊りまたは音楽に参加する。または自分の髪を切らせる。(2)報酬として旅人の瘤が取り除かれる。または金が与えられる。(3)旅人の欲張りな仲間は相棒の瘤をくっつけられる。または金の代わりに石炭を与えられる。話型AT503では主人公が不思議な存在に遭遇するが、グレッヴェールスはこの不思議な存在が地域によってツヴェルク、魔女、幽霊などのパターンに分かれることに着目し、モチーフの変遷と伝播経路、発祥地を解き明かしている。竹原は更にアラブ地域におけるジン、日本の鬼などのパターンを加えて国際比較を行った。

地域間比較は行っていないがツヴェルクに関するモチーフを網羅的に挙げて分析した論考としてはアウグスト・リューツェンズ『ドイツ英雄詩におけるツヴェルク』<sup>9)</sup>(1911)、ヴェンデルン・マルヴェーデ「マイン川以北ドイツにおけるツヴェルク伝説」<sup>10)</sup>(1933)、ハンニ・ヘスラー「メルヒェンと伝説におけるツヴェルクと巨人」<sup>11)</sup>(1957)が代表的である。リューツェンズは中世文学に登場するツヴェルク、マルヴェーデとヘスラーは19世紀から20世紀にかけて蒐集された伝承のテキストに登場するツヴェルクからそれぞれツヴェルクの性格や機能を考察している。

リューツェンズは主としてドイツ語圏とロマンス語圏の中世文学、並びに古典古代の文学におけるモチーフの借用関係を注視し、ドイツ語圏の英雄詩に登場するツヴェルクの機能とは元来悪役であると結論付けた。これに反論したのがクロード・ルクトゥーの「ツヴェルクとその類縁」<sup>12)</sup>(1981)である。ルクトゥーはまず語源学の観点からツヴェルクとこれに類似するシュラートなどとの名称・概念の相互移行の過程を分析し、ドイツ語圏の文学におけるツヴェルクの役割はむしろ主人公の味方であり性質としては善であるとした。更にルクトゥーは1958年に発表された神話学者デュメジルの三機能仮説を取り入れ、巨人とツヴェルクと英雄との関係を構造主義的に説明している。デュメジルの説では神話の登

場人物には支配者と生産者と戦士の3種の役割があり、ルクトゥーは巨人、ツヴェルク、英雄がそれぞれこの役割に該当するとした。

日本で発表されたツヴェルク研究としては宇川絵理の「ドイツ語圏のツヴェルク伝承—異人的性格と媒介者としての役割」<sup>13)</sup>(1996)と「北部ドイツのツヴェルク伝承—〈絹糸に下がった命〉の話型—」<sup>14)</sup>(1998)が挙げられる。前者はマルヴェーデの機能主義的ツヴェルク解釈を更に推し進め、人間の日常世界とその外にある「異界」とを媒介する「異人」としてのツヴェルクの機能を論じている。後者は北部ドイツに特化した話型「絹糸に下がった命」を現地の文化的・社会的文脈の下に置いて考察したものである。この話型におけるツヴェルクは洗礼というキリスト教社会の文脈に則った行動を取るが、その裏にはキリスト教以前からの民間信仰が見えることを指摘した。

あるいは大野寿子「グリム兄弟における〈小人〉像—メルヒェン、伝説そして神話をてがかりに」<sup>15)</sup>(2010)はグリム兄弟の編著作『子供と家庭のメルヒェン』(いわゆる『グリム童話集』)(1812-1857)、『ドイツ伝説集』(1816/1818)、兄ヤーコプの『ドイツ神話学』(1835)に記述された「小人」を分析し、グリム兄弟がツヴェルクやコーボルトといった表象に見出そうとしていた「いにしへのドイツ」の精神性について論じたものである。

グリムという特定の人物の「小人」像について論じた大野の論考を除き、先行研究のツヴェルク論は「民間伝承」*Volksüberlieferung*ないし「民間信仰」*Volks glauben*におけるツヴェルクを考察対象としている。ここではドイツ語の「folk」*Volk*を「民間」と訳したが、このfolkという単語はふたつの意味を持つ。ひとつは農民や日雇い労働者など社会的地位の低い人々を指す「民衆」であり、もうひとつは「言語、文化、歴史によって結びつく人々の総体」つまりスラヴ民族やゲルマン民族といった「民族」である。<sup>16)</sup>前者の意味では宮廷人や知識人といった上流階層に対置される、社会の下層に位置する人的集団を指す名称がfolkである。一方後者の意味では言語などの共通項によってたとえば「ドイツ民族」などの人的集団を諸外国の人間と対置させる概念がfolkである。

民間伝承とは「folkの伝承」という意味であり先行研究のツヴェルク論はfolkの伝承におけるツヴェルクを論じたものということになるが、民間伝承を論じる際のfolkという言葉にはここに挙げたふたつの語義の何れか、もしくは両義が含まれている。独文学者の田口武史によると、folkという概念はそれまで民衆即ち下層民の意味において軽蔑的評価を含んでいたが、18世紀末の民衆啓蒙運動の中で価値を一転させ、ロマン主義に至って民族の意味の比重が高まったこともありその精神性を肯定的に評価されることとなったという。<sup>17)</sup>グリムをはじめとする19世紀ドイツ語圏の研究者が民間伝承に関心を持った理由は、これをfolkが伝えてきたという点にある。この場合のfolkは両義的である。folkの伝承におけるツヴェルクを解釈するとは、エリート層ではない無教養な人々がツヴェルクに抱いていたイメージを読み解くことであり、同時に「ドイツ民族」が抱くツヴェルク像を読み解くことを指していた。

「民族」の意味におけるfolk概念は排他的ナショナリズムと結びつく問題もあり、戦後の民間伝承研究では厳しい批判を浴びた。<sup>18)</sup>また「民衆」の語義においても概念や研究の方法論を議論する場合には問題視されてきた。<sup>19)</sup>他方、上に挙げた主だったツヴェルク研究を見る限り、実際に民間伝承を分析する際にはあまり省みられていないのではない

かと考えられる。いずれの論考においてもツヴェルクを語る主体がフォルクであることが暗黙の前提とされており、この点について戦前の研究と戦後の研究との間に差は見られない。

先行研究が分析対象としたテキストが物語を語られた通りに書き取って保存したものであれば、これを分析することは語り手と想定されるフォルクの思考について論じることになるだろう。ところが、伝承を蒐集・記録した文献資料は必ずしも機械的な保存場所ではない。何故ならば伝承の主体とされるフォルクとは上述のように識字能力の低い階層であり、これに対して上記の研究に使用された資料は文字資料であるためである。この資料に掲載されたテキストには物語を語り聞かせた人間とそれを書き取った人間の二者が介在している。ツヴェルクに関する従来の研究はツヴェルクを語る側へのみ焦点を当ててきたが、これを記録した側の作用についてはこれまで着目されてこなかった。近代ドイツ語圏における本格的な伝承の蒐集・研究の礎を築いたのはグリム兄弟であるとされるが、グリムが刊行に際して物語のテキストに手を入れたことは既に知られている。<sup>20)</sup>グリムの後に続く蒐集者も同様である。たとえば低地ドイツ語方言で語られた物語を共通語に直すというプロセスひとつ取っても、元の語りから乖離することは避けられない。

ただし、本稿は伝承の蒐集・刊行者による「歪曲」を批判しようとするものではない。「そもそも伝承文学としての民衆文学は伝承者の語り口によって変化が生じるのが常であり、絶対的オリジナルは存在しえない」<sup>21)</sup>ためである。民衆文学を狭義の文学との対比において定義しようとする場合、その創作者から定義する立場と受容者から定義する立場がある。<sup>22)</sup>前者はフォルクによって語られる物語を民衆文学と呼び、後者はフォルクに受け入れられる物語を民衆文学と呼ぶ。より正確には、創作者と受容者の相互作用によって成立するものが民衆文学であると定義し得るだろう。この創作者と受容者がどちらも特定の社会に生きる人間である以上、民衆文学は時代や地域といった背景の影響を受けて常に変容するものである。テキストの「歪曲」を問題視する批判は詰まる所、「正しいテキスト」が存在するという前提に立っている。だが、こうした民衆文学の性質に鑑みるに、正しいテキストと歪曲されたテキストがあるとする見解は適切でなく、個々の文脈に即したテキストがあると見る方が妥当と思われる。

即ち、先行研究における問題点とは、こうした伝承文学の主語の問題を放置し、暗黙のうちにフォルクを担い手としてツヴェルクについて論じてきたことにある。この問題点が資料を扱う手法にも表れている。マルヴェーデらの論考は分析対象とする資料を19世紀から20世紀にかけて出版された伝説集から抜き出している。この資料から読み解けるツヴェルク像とは、19世紀から20世紀にかけてのドイツ語圏という特定の文脈におけるツヴェルク像である。これは純然たるフォルクの思想を反映したものとしてよりも、むしろ語り手と蒐集・記録者との相互作用の中で成立した像として読むべきではないだろうか。そこで本稿では、従来注視されてこなかった後者の思想に焦点を当ててみたい。

既に述べたように、ドイツ語圏では19世紀初頭よりグリム兄弟をはじめとする蒐集者によって伝承の蒐集・刊行が盛んに行われるようになった。18世紀以前にも民間伝承を集めた刊行物は存在したが、主に娯楽読み物として出版されたものである。そのため、聞き取ったままに伝承を記録することよりも編著者の裁量によって読み応えのある文章に加工す

ることが当然であった。これに対し、グリム以降の民間伝承蒐集には学術研究を目的として掲げるものが登場する。他愛ないお話とされてきた「伝説」Sage<sup>23)</sup>は文化的価値を認められ、大学や学術機関の研究者が論じるに値する対象と見なされるようになった。その結果、「伝説の内実は細部に至るまで損なわれてはならず、事柄や状況は偽りなく集められねばならない」<sup>24)</sup>と表明したグリム兄弟の姿勢が受け入れられ定着する。実際には上述の通りテキストの加工が行われていたのだが、伝説集編者の立場としては加工ではなく修正ないし調整である。汚損した発掘品の修繕のように考えられていた。少なくとも編者の見解としては、蒐集した物語は素材のまま伝説集に収録されたのである。

無論、これは編者が伝説集において無色透明な存在であることを意味しない。編者の意思はテキストそのものの加工ではなく編纂の技法を通して表れている。この観点はドイツ語圏の伝承文学研究においてはあまり見受けられないが、日本の説話文学研究においては積極的に論じられている。たとえば国文学者の西尾光一は『今昔物語集』などを指して「盛んに集めること、もしくは並べることによって、単独の説話では感じ取れないような、いわば集団としての文学的な迫力を生む結果になっているものがある」<sup>25)</sup>と述べ、「そういう説話集においては、編者は説話を集め並べることによって、何かを表現し、何かを読者に語りかけるといふ、いわば一人の〈作家〉としての働きを果たしているのである」<sup>26)</sup>と編者の作用を評価した。こうした観点から編者のもたらした「表現」について論じるのが配列研究である。テキストの組み合わせと配列によって編者は個々のテキストのみでは表現しきれないメッセージをも込めることができる。

本稿ではこの観点に基づき、19世紀のドイツ語圏における伝説集の配列とツヴェルク伝説の位置づけについて考察する。先行研究が資料となるテキストを抽出した伝説集は、多くがグリム以降の学術的伝承蒐集の潮流を汲んだものである。その最も初期にあたる19世紀前半に刊行された伝説集を分析することで、伝承蒐集に携わった当時の知識人の立場から見たツヴェルク伝説について論じる。以下、まず第3章でグリム兄弟の伝説集におけるツヴェルク伝説を論じ、次いで第4章・第5章でグリムの門下生にあたるドイツ神話学派の研究者が編纂した伝説集におけるツヴェルク伝説について分析する。

### III グリム兄弟『ドイツ伝説集』のツヴェルクについて

まず、学術的伝承蒐集の先駆けと見なされるグリム兄弟の『ドイツ伝説集』<sup>27)</sup>について述べる。『ドイツ伝説集』は2巻編成となっており、「より歴史に結びつく伝説とより土地に結びつく伝説とを分け、前者を第2巻に置いた」<sup>28)</sup>という。ツヴェルク及びコーボルトの伝説が収められているのは第1巻である。同じくグリム兄弟の編纂による『子供と家庭のメルヘン』は7版に及ぶ改訂が行われたのに対し『ドイツ伝説集』は兄弟の存命中には第2版までの改版に留まっており、テキストそのものには手が加えられていない。替わりに、伝説の配列によって編者の見解が表現されている。

一般に伝説集の配列には特段の法則を設けない雑纂形式の他に、語られた出来事を年代順に並べる年代記形式、地名に沿って並べる地域基準配列形式、そして内容基準配列形式がある。年代記形式は特に歴史伝説に重点を置いた伝説集に見られる。ルートヴィヒ・ベ

ヒシュタイン Ludwig Bechstein (1801-1860)の『テューリングンの伝説集成と伝説圏』(1835-38)がこの形式をとっており、当地の領主の家系にまつわる伝説を開祖から順に語る。一方、地域基準配列形式はグリム兄弟の弟であるフェルディナント・グリム Ferdinand Philipp Grimm (1788-1845)『ドイツの民間伝説』(1838)のように「旅人の伴」<sup>29)</sup>を謳う伝説集において、各地の名刹に味わいを与える効果を発揮している。

グリム兄弟の『ドイツ伝説集』は内容基準配列である。『ドイツ伝説集』の配列を分析した植朗子によると、それぞれの伝説は細かなモチーフに基づいてグループ分けされている。更にそのグループは断絶された区切りではなく前後のグループとの連関を持ち、共通するモチーフが双方のグループに配置されることで一方から他方へと連想がつながるようになっている。つなぎ目には両方のグループに属する伝説が置かれ、あるいはゆるやかに移行する。この工夫された配列手法により、編者が伝説の中に認めた類似性や相互関係を表現することができる。植はこの手法を「連想型配列形式」と呼び、『ドイツ伝説集』の配列はグループ型配列形式と連想型配列形式の混合型であるとした。<sup>30)</sup>

『ドイツ伝説集』においてツヴェルクに関する伝説は4つのグループに分けられている。①DS29-48、②DS71-78、③DS147-156、④DS301-303である。この内①③④がツヴェルク、②はコーボルトのグループに属する。これらの伝説をグループ化し、それについて1箇所にとまらなかったという事実は、グリム兄弟が何らかの意図を持って配列を行ったことを示唆している。植の表を参考にまとめると第1巻の構成は次に示す通りである。

- 1. - 3. 鉱山
- 4. - 15. 人型の霊的存在
- 16. - 20. 巨人
- 21. - 28. 王と英雄
- 29. - 48. ①ツヴェルク
- 49. - 69. 水の精
- 71. - 78. ②コーボルト、家の精
- 79. - 83. 人型の霊的存在
- 84. - 86. 呪的な宝
- 87. - 90. 取り替え子
- 91. - 92. 土地と女性
- 93. - 99. 死と死者
- 100. - 113. 土地の縁起
- 114. - 122. 女性
- 123. - 124. 鳩
- 125. - 133. 罪人
- 134. - 142. 巨人と乙女、土地の縁起
- 143. - 146. 予兆と予言
- 147. - 156. ③ツヴェルク
- 157. - 162. 宝

163. - 169. 災害  
 170. - 176. 土地の縁起  
 175. - 179. 幽霊と死者  
 178. - 182. キリスト教  
 182. - 210. 悪魔  
 211. - 212. 宝  
 213. - 223. 人狼、竜、動物  
 224. - 235. 死霊と呪い  
 233. - 243. パン、飢餓、子供の死  
 244. - 256. 魔術と魔術師、魔女  
 257. - 282. 死者、死の告知  
 283. - 288. 火と境界  
 289. - 290. 教会  
 291. - 298. 予兆  
 295. - 296. 王と英雄  
 299. - 300. 植物と動物  
301. - 303. ④ツヴェルク  
 304. - 313. 死者  
 314. - 315. 宝  
 316. - 326. 巨人  
 327. - 331. 死者  
 332. - 333. 宝  
 334. - 335. 罪人  
 336. - 339. 悪魔  
 340. - 341. 死者  
 342. - 344. 予兆  
 345. - 350. キリスト教  
 352. - 363. 死と生

以下、4つの「こびと」伝説グループについて順に述べる。まず④ツヴェルク伝説のグループは、主として山に住む「こびと」に関する伝説群である。これはDS1-3の鉱山伝説から続く山と土に関する伝説の大きな流れの中に置かれている。直前には王と英雄に関する伝説群が置かれ、その中のDS23「キュフホイザー山のフリードリヒ赤鬚帝」及びDS27「ウンターベルク」にも「小さな人」*kleine Männchen/Männlein*が登場する。これは連想型配列形式の特色がよく表れた配列である。前のグループの中に次のグループと共通する内容のテキストを置くことで次の伝説グループを予期させる手法であり、この共通性によって王・英雄の伝説群とツヴェルクの伝説群が関連性を持つことを示している。

DS23 キュフホイザー山のフリードリヒ赤鬚帝<sup>31)</sup>

フリードリヒ帝はキューフホイザー山の中で最後の審判の日を待っている。ある農夫は使いの小さな人から王のもとに案内され、穀物の代わりに金を与えられた。またある羊飼いは使いのツヴェルクに連れて行かれ帝と会話をした。

#### DS27 ウンターベルク<sup>32)</sup>

ウンターベルクないしヴンダーベルクは(中略)中が空洞になっており、宮殿、教会、修道院、庭園、金銀の泉がある。小さな人達が宝を見張っていて、夜中になるとよくザルツブルクの大神堂に出かけて祈りをあげた。

このDS23とDS27にはどちらもツヴェルクが登場する。DS27には王の記述が見られませんが、DS23ではツヴェルク達が山中に眠るフリードリヒ帝に仕えているとされている。両者は山の中の怪異に関して語る点で共通しており、「山」「山中に眠る王」「山中に暮らすツヴェルク」という連関性を持つモチーフによって伝説群をつないでみせている。

ツヴェルク①の伝説群はDS48「苔族を狩る荒狩人」を結節点として、次の水の精に関する伝説群へと移行する。「苔族」Moosleuteは湿った場所に住み苔を纏った小さな霊的存在であり、体格の点においてツヴェルクに近く、住み処の点において水の精に近い。この伝説を結節点に置いたことで、ツヴェルクと水の精が全く同じカテゴリーではないものの非常に近似した存在であるというグリムの見解が示されている。「はじめに」で挙げたツヴェルクの事典上の定義に従えば、ツヴェルクに近い登場人物とは水の精よりもコーボルトのほうである。グリムの定義においてはコーボルトよりも水の精がツヴェルクに近いものとして捉えられていたと考えられる。

コーボルトないし「家の精」Hausgeistについての伝説群はツヴェルクの伝説群に隣接しておらず、水の精グループの次の②DS68~76に置かれている。この伝説群では「小さな人」やツヴェルクといった呼び名は登場せず、コーボルト、家の精、ないしは単に「霊」Geistと呼ばれている。ここでの「霊」にはひとつ目のツヴェルク伝説群とも共通する「精霊」の意味に加え、死者の霊としての用法が見受けられる。

#### DS71 コーボルト<sup>33)</sup>

幾つかの場所では老若男女がコーボルトを持っていて、これがあらゆる家事を片付けてくれる。(中略)彼らは正しく人間で、斑の上着を着た小さな子どもであると信じられている。またある者の言うには、彼らの一部は背中に刃物が刺さっていて、あるいはおそろしい形相をして、以前に殺された時の凶器であろうと思われるものが付随している。何故ならば彼らは家庭内で殺された者の魂であるからだ。

この伝説においてコーボルトは殺された人間の魂とされる。ただし前後のグループにはそうした描写がなく、また死者に関する伝説群(DS93-99)や幽霊に関する伝説群(DS175-179)とは位置が離れていることに注意すべきであろう。この伝説を単体で読むならばコーボルトはある種の死者となるが、配列から見ると『ドイツ伝説集』において他の死者・幽霊とは異なる範疇として捉えられていたのではないかと考えられる。

ツヴェルクとの区分を考える上で重要な点は、コーボルトは小さな人間の姿をしている点でツヴェルクを思わせるが、山中に住んではいないことである。同じ伝説群に属する他の伝説を見ても明らかなように、コーボルトは人間に所有される、あるいは憑いている。ツヴェルクの住み処は山中でありコーボルトの住み処は人家である。

次に③ツヴェルク伝説群は、DS147~155までの連続したツヴェルク伝説と、DS156~168の中に飛び石状に含まれるツヴェルク伝説に分けることが出来る。DS145はその前の予言・予知のグループに置かれ次のツヴェルク伝説群を導く呼び水となっている。

DS147からの群の前半部分は人間の隣人として暮らしていたツヴェルクが居住地を去る伝説ばかりが集められており、ツヴェルクの退去が群の主題と言える。人間とツヴェルクは友好的な隣人関係を築いていたが、人間の悪戯や不誠実に愛想をつかしたツヴェルクが別の土地へと移るのである。大野が述べた「人間との良い形でのコミュニケーションが薄れ、あるいは消滅してしまい、その存続の危機的状況ともいべき姿」<sup>34)</sup>としてのツヴェルク像が最も端的に表れているのがこの③群であると言えよう。ここではツヴェルクが不本意ながら立ち去ることを余儀なくされる悲哀に満ちた存在として描かれている。

最後の④ツヴェルク伝説群 DS301~303は、ツヴェルク伝説群①と重複する伝説を含む。DS296からの群で山中に眠る王や英雄の伝説も再び表れており、またDS304以降には水の精が登場する。これは離れた位置で類似の構造を繰り返すことによる印象づけの効果も狙われていると考えられる。一方で①群には見られなかった型もある。DS301「カモシカ狩人」はその前のDS300「動物の楽園」から連続しており、野生動物の王としてのツヴェルクが登場する。DS300では山中に人間の狩人が狩りを許されない動物の楽園があると語られ、DS301では狩人が殺してしまったアルプスカモシカがツヴェルクの家畜であったためにツヴェルクから罰せられるモチーフが語られる。①群 DS23においては赤髭帝が主でツヴェルクは従者であるが、④群 DS301においてはツヴェルクが獣の主である。

4つの伝説群からは『ドイツ伝説集』におけるツヴェルク像とコーボルト像について次のことが指摘し得る。まず①群と②群の対比から、ツヴェルクは山を主な居住地とするのに対してコーボルトは人間の家を住み処とする。更にツヴェルクは王や英雄と関係を結び、宝を守護する。一方コーボルトは時として死者の霊である。

③群では①群と同じく宝に携わる存在としてのツヴェルク、そして予言の力を持つツヴェルクが語られる。このように人間とは一線を画す能力と特性を有するツヴェルクは、それでいて人間の傍若無人によって退去することとなる。しかし④群におけるツヴェルクは再び①群と同様に山の中で暮らしており、また①群には表されない獣の主としての権能を有している。この配列からは編者の懐古的願望も読み取ることができる。③群において立ち去ったツヴェルクは④群において失った力を取り戻し、復権するのである。

本稿の論点に関して留意すべきは①群と②群との間に水の精に関する伝説群が挟まれている点である。この配置から鑑みるに、『ドイツ伝説集』においては水の精がコーボルトよりもツヴェルクに近いものとして扱われていると考えられる。コーボルトとツヴェルクは「小さな人」として同類のグループにくくられなかったのである。両者の大きな相違点としてはやはり住み処の違いが指摘し得る。山に関する伝説群と連続するツヴェルク伝説は人家に関連するコーボルト伝説とは異なる範疇として捉えられている。

### III ドイツ神話学派の伝説集 (1) E. ゾンマー

このようなグリム兄弟のツヴェルク像は、後続の伝承蒐集・研究者達にどのような形で引き継がれたのだろうか。ここからは、グリム兄弟から伝承蒐集の姿勢を直接に引き継いだ神話学派の伝説集におけるツヴェルク伝説の位置づけについて述べる。主としてベルリン大学においてグリム兄弟の薫陶を受けた研究者の手による伝説集であり、最初期のものは1830年代から1840年代にかけて刊行されている。<sup>35)</sup>

グリム兄弟は1841年にプロイセン王国のベルリン大学にゲルマニスティクの教授として就任し、兄ヤーコブは1848年まで、弟ヴィルヘルムは1852年まで教鞭を執った。<sup>36)</sup>そこで多くのゲルマニストを輩出し、彼らがグリム兄弟の民間伝承研究を発展させた。グリム兄弟の門下生の内、アダルバート・クーン Adalbert Kuhn (1812-1881) やヴィルヘルム・シュヴァルトツ Wilhelm Schwartz (1821-1899)、ヴィルヘルム・マンハルト Wilhelm Mannhardt (1831-1880) などはドイツ神話学派と呼ばれる一派を形成した。民間伝承を「神話」の名残として読む解釈の主要な担い手であり、後にウィーン神話学派やロシアのアファナーシェフ、イギリスのフレーザーなどにも大きな影響を与えたとされる。<sup>37)</sup>ドイツ神話学派の編纂した伝説集は今日でも資料的価値が高く、また従来子ども騙しの他愛ないお話とされていた「迷信的伝説」の類を再評価したという点においてその功績は無視し得ない。

ただし、「大きな流れの点では、グリム兄弟のその後継者たちは、グリム兄弟にとってはまだ仮説の色合いを残していた見解をしばしば絶対視するようになった」<sup>38)</sup>と言われるように、神話学派の学説や研究手法については現在では批判的に受け止められている。<sup>39)</sup>たとえばクーンの学説はドイツ神話学派の中でも自然神話学派と呼ばれ、伝承の背景には必ず嵐や雷といった自然現象に関する神話が潜んでいると解釈した。<sup>40)</sup>これは日本の神話学にも強く影響を与えたマックス・ミュラーなどにも継承される解釈方法であるが、<sup>41)</sup>あらゆる伝承に対して一律に同じ解釈を適用したため、牽強附会が過ぎるとして批判を受けている。

ドイツ神話学派の研究者によって最も初期に刊行された伝説集としてはカール・ミュレンホッフ Karl Müllenhoff (1818-1884) 『シュレースヴィヒ、ホルシュタイン、ラウエンブルク諸公領の伝説、メルヒェン、歌謡』(1845)、エミール・ゾンマー Emil Sommer (1819-1846) 『ザクセンとテューリンゲンにおける伝説、メルヒェン、習俗』(1846)、フリードリヒ・パンツァー Friedrich Panzer (1794-1854) 『バイエルンの伝説と習俗：ドイツ神話学への寄与』(1848/55)、クーン『マルクの伝説とメルヒェン』(1843)、クーンとシュヴァルトツの共編『北ドイツの伝説、メルヒェン、習俗』(1848)がある。この内クーンとシュヴァルトツによる伝説集は地域別配列形式をとり、ミュレンホッフ、ゾンマー、パンツァーの伝説集が内容基準配列をとっている。但しパンツァーの伝説集については、ツヴェルク伝説の章を含む第2巻が本人の没後に他者の手によって刊行されたため、配列の意図についても別途調査の必要がある。そこで本稿では、特にゾンマーとミュレンホッフの伝説集を配列の観点から分析し、ツヴェルク伝説の位置づけについて述べる。

ゾンマー編『ザクセンとテューリンゲンにおける伝説、メルヒェン、習俗』はドイツ中部のテューリンゲン及び中東部のザクセン地方を対象とした伝説集である。70話の伝説と11話のメルヒェンが収録され、<sup>42)</sup>伝説の部はまとめると次のような構成になる。

Nr. 1 – 5 男性の怪異

Nr. 6 – 18 女性の怪異

Nr. 19 – 21 精霊

Nr. 22 – 33 コーボルト

Nr. 34 – 39 水の精

Nr. 40 – 44 お化け、幽霊

Nr. 45 – 48 悪魔

Nr. 49 – 55 魔女

Nr. 56 – 60 宝

Nr. 61 – 70 歴史伝説

この伝説集にツヴェルクという登場人物にまつわる伝説は収録されていないが、第19番「ヴィヒテル」Wichtel、20番「ギュットヒェン谷」、21番「穀物の天使」のグループが本稿で論じるツヴェルクに重要な意味を持つ。

ヴィヒテルとはヤーコプ・グリムの『ドイツ神話学』(1835)の「ヴィヒトとエルベ」Wicht und Elbe<sup>43)</sup>の章において解説される概念であり、ヴィヒトないしヴィヒテルと「エルベ」Elbeは共にツヴェルク的な小さな霊的存在を包括的に指している。<sup>44)</sup>ヤーコプによるとヴィヒトとはラテン語の *genius* (守護霊) に相当する概念である。元来は「矮小な被造物」程度の意味で人間を指して用いられたこともあるが、時代が下るに従って霊的存在を指すようになった言葉とされる。<sup>45)</sup>ヤーコプは続けて「アルプ」Albにも *genius* という表現を用いており、<sup>46)</sup>両者が共に守護霊としての意味を持つ概念と見なされたことが分かる。アルプ、エルベ、またエルフェはそれぞれに同じ語源から発生した異音語であり、北欧神話の『エッダ』ないし『サガ』に登場する霊的存在である。ヤーコプはこれらの登場人物をツヴェルクの起源としている。ヤーコプによると北欧神話の登場人物であるエルベには白いものと黒いものがあり、この内の黒いものがツヴェルクと同定されるという。<sup>47)</sup>ゾンマーの伝説集におけるツヴェルク的なものはこの19-21番のグループに表れていると見ることができるだろう。

グリム兄弟の『ドイツ伝説集』ではツヴェルクと水の精の伝説群が隣接する一方でコーボルトの伝説群が離して置かれていると述べたが、ゾンマーの伝説集においてはこの配列が逆転している。ヴィヒテルの伝説群の次がコーボルト伝説群、次いで水の精の伝説群である。この点を考える手がかりとして、以下に挙げる20番の伝説がある。

## 20. ギュットヒェン谷<sup>48)</sup>

ハレの北東側、ガイスト門とシュタイン門の間に小さな谷があり、ギュットヒェン谷またはギュットヒェン溝と呼ばれている。ハレで生まれる子供はここからやって来る。谷

にはある夜、黒い馬車に乗った貴婦人がやって来てそこで消えたこともある。この理由を知らない者もいるが、別の者によるとここにはかつて地中に沈んだ城があって、天気の良い日には今でもまだ城の塔の先端が輝くのが見えるだろうということだ。

ここにはヴィヒト、エルベ、ないしツヴェルクと呼ばれる存在が登場しない。黒い馬車に乗った貴婦人のくだりを読むと、むしろ2番目の女性の怪異のグループに配置する方が妥当であったようにも思われる。この伝説についてゾンマーは次のように解説する。

人間が生まれる際にはエルベの世界から出てきて、そして死ぬ時にはそこへ帰るのだというイメージは、我らの異教性の深みに根ざしている。そして、エルベとはエレメントの諸力の人格化から発生しているが故に、人間の魂は普遍的自然の力の一部に過ぎないという汎神論的な表れ方が人間の誕生に際して自覚され、死に際して、全き自然の中を巡る生というものに再び回収されるのである。<sup>49)</sup>

ゾンマーによると「ギュットヒェン」Gütchen はエルベないし「エルベ的存在」elbische Wesen である。<sup>50)</sup>上の引用文の中で、エルベとは「エレメントの諸力の人格化」と述べられている。エレメントとは火・水・気・土の四大元素を指し、中世以来の自然哲学において自然界を構成するとされる原理である。そうした「汎神論的」世界観の中で、人間の魂もまた循環する自然の諸力の一環として位置づけられる。ギュットヒェンの名を持つ谷から新生児が生まれ来るとする伝説は、ゾンマーにとってこのような「異教」的世界観を表現している。こうした解説を通して、ゾンマーがヴィヒテルと思しき登場人物のいない20番の伝説を取ってこの位置に置いた理由が判明する。ここでゾンマーはテキスト中の登場人物ではなく、物語の背景となる世界観を分類基準にしているのである。

19番「ヴィヒテル」は岩地に「小さなヴィヒテルの民」Wichtelvölklein が住んでおり人間と交流する伝説、21番「穀物の天使」は収穫期の穀物畑に踏み入ると穀物の天使に掠われてしまうと子どもを脅かす伝説である。何れも自然界に属する霊的存在にまつわる物語であり、この2話の間に挟むことで読者はギュットヒェンという名称が耳慣れずとも自然信仰的世界観を感知することができる。

続くコーボルトの伝説グループにおいてゾンマーはクーンの『マルクの伝説とメルヒェン』における解説「コーボルトの伝説を見ると、これが元来火の神であったことは明白である。つまりはまず何よりも、人が崇拝していた竈の火なのだ」<sup>51)</sup>を引き、コーボルトないし家精は元来火の神であったと推定する。<sup>52)</sup>クーンは後に全ての神話は自然現象を表しているとする自然神話学派を打ち立てるが、この「火の神」解釈には既にその萌芽が見える。ただし実際にはクーン自身が述べるように、自然の火というよりは人間の家庭の中にある「竈の火」である。

ツヴェルクはグリムの『ドイツ伝説集』において冒頭から続く土・山のグループの中に置かれており、ツヴェルクを土の精とする解釈はグリム兄弟の中にも表れていると言える。一方でコーボルトは『ドイツ伝説集』において、自然の火の精というよりも家の精として扱われている。このことは、『ドイツ伝説集』の解説編としての役割を持つ『ドイツ神話学』

の記述によっても明らかである。『ドイツ神話学』の「ヴィヒトとエルベ」の章では山の精としてのツヴェルク、森の精、水の精、そして家の精について順に論じられている。その中で「家の精はまず何よりも人間と一つ屋根の下に住む点で人間の親しい仲間である」<sup>53)</sup>と述べられており、山野に住む精との違いが強調される。ゾンマーの伝説集におけるコーボルトを自然のエレメントの精としてツヴェルク的な精霊と近づける分類はグリムの分類とずれたものであることが指摘できる。

#### IV ドイツ神話学派の伝説集 (2) K. ミュレンホッフ

ミュレンホッフ<sup>54)</sup>の4分冊からなる伝説集『シュレースヴィヒ、ホルシュタイン、ラウエンブルク諸公領の伝説、メルヒェン、歌謡』<sup>55)</sup>はデンマークとの境界地域にあたるユトランド半島とその周辺地域を対象とした伝説集である。4分冊の内、本稿において特に分析すべきは『神話体系』*Mythologie*と題された第3巻である。第4巻末に添えられた概略に基づくと第3巻の構成は次のようになっている。<sup>56)</sup>

345. – 378. ベーオウルフ、水陸の巨人

379. – 429. ツヴェルク

430. – 452. 家のコーボルト

453. – 477. 水の女、白い女(女神)、沈んだ城、宝

478. – 484. 神話的に解釈される自然の事物

485. – 500. 荒狩人

501. – 506. 丘陵、眠れる英雄と軍勢

507. – 512. 実の生る木

ここでもゾンマー同様、ツヴェルクの次にコーボルト、その次に水の精を置く配列が見られる。ただし表題が「家のコーボルト」であることから、ミュレンホッフはグリムの解釈と同じくコーボルトを人間の家に属するものと見なしていたことが分かる。ミュレンホッフの伝説集に収録されたテキストの中では、家の精はコーボルトではなく「プーク」*Puk*、「ニスプーク」*Nißpuk*等と呼ばれている。これは対象地域であるユトランド半島付近における家の精の呼び名である。また船に憑く精「クラバウターマン」*Klabautermannchen*もこのグループに置かれている。

さらにこの伝説群においては、名称の上でコーボルトではなくツヴェルクと思しき登場人物の物語が含まれている。439番「地下の人がミルクを舐める」、443番「ランツァウ伯の幸運」、444番「ヨシアス・ランツァウの守り刀」、445番「裸の子ども達」、451番「追い払われたニスプーク」、452番「追い払われたツヴェルク」である。439番と445番では「地下の人」*Unterirdischen*、451番と452番ではこれが訛った名称が用いられており、これらはツヴェルク伝説群の2話目にあたる380番によるとツヴェルクの別名である。380番にはホルシュタイン周辺地域におけるツヴェルクの名称が列記されている。<sup>57)</sup>一方443番と444番では男女の「山のこびと」*Bergmännlein/-männchen/-fräuchen*が登場する。

巻末の概略に従えばこの伝説集ではツヴェルクとコーボルトが別個のグループとなっているが、その上でこれらがツヴェルクのグループではなくコーボルトのグループに配置されたということは、ミュレンホッフは名称以外の要素によって両者を区別していたということになる。ミュレンホッフの分類基準もゾンマーと同様に世界観を問題にしたものだろうか。その基準はツヴェルク伝説群及びコーボルト伝説群に配列された各話の内容から見て取ることができる。

ミュレンホッフの伝説集にもやはりゾンマーと同じく、配列によって伝説に対する解釈を補助する効果が見受けられる。たとえばミュレンホッフのツヴェルク伝説群には次に挙げる 389 番のように、ツヴェルクやそれに近いものと思われる存在が一切登場しない伝説が幾つか含まれている。

### 389. ドラーゲドゥッケ

ガイゼホイの近くのニュッベルの畑で、ある男が耕作していた。男は丘の側で壊れたパン焼き用の木べらと棒に気がついた。農夫はその道具を家に持って帰り、修繕して、棒は熊手として元の場所に置いた。するとそこにはドラーゲドゥッケが置いてあった。これはつまるところ、いつもちょっとしたお金が入っている箱なのだが、そこから欲しいと思う分だけ取り出すことができるのだ。このドラーゲドゥッケは長いこと彼のニュッベルの蹄にあって、持ち主は常に豊かな人々だった。<sup>58)</sup>

地下の人、あるいは北ドイツ方言による訛った呼称も含め、この伝説にツヴェルクは登場していない。登場人物は農夫のみでありこの伝説だけを一読してもツヴェルク伝説であるとは気づき得ない。それにもかかわらず、この伝説集の中ではツヴェルク伝説と見なされているのである。これは前後の伝説と照らし合わせることで初めて可能となる解釈である。385 番から 394 番にかけて、人間と友好的な持ちつ持たれつ関係を築く地下の人の伝説が並べられている。

### 387. 借りた深鍋

その山の中には地下の人が住んでいて、しばしば彼らがバターを作る音が聞こえていた。かつて、農夫達は地下の人と殊の外仲良くしていた。村で婚礼があつて深鍋や平鍋といったものが必要になると、農夫は山へ出かけてノックした。すると地下の人は「どうしたんだい？」と尋ね、農夫は「深鍋を借りたい、明日はハンスとトリーナの結婚式だから」と応える。農夫は望む通りの大きさの鍋や食器を借りることができた。お礼には、その鍋で煮炊きした食事の余りを入れて返すだけで良いのだった。<sup>59)</sup>

### 390. 地下の人のテーブル

その山では特別な祝福があつた。農夫達は朝から耕作して、昼食をとるために家に戻る必要がなかった。昼時になると、食器と上等な食事の載ったテーブルが現れるからだ。これは全て地下の人がやってくれていた。長いことこれは上手くいっていて、多くの人々のご相伴に預かることができた。けれどもある時傲慢な若者がフォークを一本くすねた。

次の日、昼になってもテーブルが現れないので農夫達は家に戻らなければいけなくなった。若者はフォークを返したが、二度とテーブルが用意されることはなかった。<sup>60)</sup>

この様に、当該地域においてツヴェルクは人間に道具や労力を貸し与え、人間はこれにささやかな礼物を返す。また逆も然りである。ミュレンホッフはツヴェルクをこうした沈黙交易的な相互関係の中で捉えているのである。この並びの中にドラーゲドゥッケの伝説を配置することにより、読者はこれがツヴェルクから人間に対して与えられる礼物であると理解する。この解釈はミュレンホッフ自身のツヴェルク像を反映したものであり、伝説の配列を通して、敢えて解説をつけずとも読者に伝わる事が可能となる。

この効果に加えて、ミュレンホッフの配列にはもうひとつの契機が見受けられる。これは上に言及した、コーボルト伝説群に置かれたツヴェルク系の名称を持つ登場人物の伝説を見ると明らかになる。まず 439 番は、零れたミルクもしくはビールを地下の人が舐めるが、代わりに彼らの滞在する場所には幸運が舞い込むという話である。ここでの登場人物は名称こそ地下の人となっているが、家に幸運をもたらす代わりにささやかな飲食物を受け取るという行動の点では家の精と共通点を持つ。430 番から 441 番にかけては人間の家庭に富や幸運をもたらすコーボルト伝説である。

同様のことが次の 443 番から 445 番にかけての伝説群にも指摘し得る。ここでは人間がツヴェルクの出産に呼ばれて手助けをし、その礼として子孫繁栄の呪力を持った宝物を貰い受ける話が語られている。中でも 443 番はミュレンホッフ自身も解説したようにグリムの伝説集 41 番「ランツァウ家の祖妣」<sup>61)</sup>に一致する伝説である。同じ助産のモチーフはグリムの伝説集において水の精のグループ(68 番から 70 番)にも配置されており、本来は水の精に特有のモチーフであったものがツヴェルクに適用されたのではないかとする解釈もある。<sup>62)</sup>グリムの配列形式においては同じ助産モチーフがツヴェルクと水の精との近似性を連想させていた。一方ミュレンホッフにおいてはツヴェルクとコーボルトとの近似性が同じモチーフによって示唆されていると言える。助産モチーフはツヴェルク伝説群の 407 番及び 408 番にも見受けられた。

続いて 451 番と 452 番はコーボルト伝説群の末尾にあたる。451 番は 2 話に分割され、ひとつ目は 2 軒の家のニスプークが諍いを起こし負けた片方が消える話、ふたつ目は石の下に複数の地下の人が封じられていた話である。452 番では人間が地下の人を疎ましく感じており、彼らを蔵ごと焼き殺している。総じて不和を描いた伝説である。

同じ内容がツヴェルクの伝説群にも見受けられる。ミュレンホッフの伝説集においては、ツヴェルクに関する伝説群に特徴的な配列が見受けられた。ここでツヴェルク伝説は以下のように並べられている。

379. ツヴェルクの誕生

380. - 386. ツヴェルクの性質

387. - 394. ツヴェルクと人間の友好的関係

395. - 397. 人間を祭事に招くツヴェルク

498. - 401. ツヴェルクの訃報

402. - 404. ツヴェルクの酒杯  
 405. - 409. ツヴェルクを助ける人間  
 410. - 426. ツヴェルクと人間の敵対的關係  
 427. - 429. ツヴェルクの退去

この伝説群の配列は当該地域におけるツヴェルクに関して、一本の大きな物語を描いていると見ることができる。即ち、ツヴェルクが登場し、隣人として人間との間に関係を築き、しかしながら不和のために人間の側を去る、という物語である。

ツヴェルクが人間の側から立ち去って行くというイメージはグリム兄弟が既に提示したものである。『ドイツ伝説集』のツヴェルク伝説群③はこの立ち去るツヴェルクにまつわる伝説が主軸となっている。ミュレンホッフの配列においてグリムと異なるのは、グリムの『ドイツ伝説集』においてツヴェルクの復権を匂わせていたツヴェルク伝説群④が置かれていない点である。コーボルト伝説群、ツヴェルク伝説群は共に人間の側から離れて行く精霊の伝説グループで終えられている。

ここでツヴェルクとコーボルトは何れも人間から離れているが、その過程にはひとつ大きな相違がある。それは、ツヴェルク伝説群の末尾にあたる427番から429番においてはツヴェルク達が自ら土地を去っているが、コーボルト伝説群の末尾となる451番と452番では人間がコーボルトを疎んじて排除しようとする点である。451番及び452番に配置された地下の人物伝説では、霊的登場人物と人間側との関係性、またその前提となる精霊の性質や行動の点がツヴェルク的でなくコーボルト的であると見なされたのではないだろうか。ミュレンホッフの伝説集においてもやはりゾンマー同様、テキストの分類には編者の解釈が介在していることが分かる。

## V おわりに

ドイツ神話学派の伝説集の中で内容基準配列を選択したミュレンホッフ、ゾンマーの伝説集には、次のような配列の工夫が見受けられた。まず、ツヴェルクやヴィヒトといった存在が登場しない伝説をそのグループの中に置くことでツヴェルク伝説ないしヴィヒト伝説として読ませることを可能としている。次に、グループの中で並べる順序を通して一本のストーリーを描いてみせている。そして、テキストに挙げられる名称よりも行動や性質に基づいてグループ分類を行っている。これらは師グリムが『ドイツ伝説集』で行った連想配列形式に比べると精緻さには劣るが、何れも配列による演出効果を有している。

グリムとミュレンホッフらの配列において大きく異なる点は、グリムはテキストに書かれてあることそのものに従った分類を行ったが、ミュレンホッフとゾンマーはむしろ背景に想定される解釈を分類基準として優先したことだろう。グリムは伝説集序文において「殆どどの伝説にも様々な要素が互いに絡み合っていて生きており、それらはまず調査の進展によって、それも個々の伝説を区分するのみならず、要素の最小のものを切り出すことではじめて明らかになる。故に内容に基づく配列で、たとえばツヴェルク伝説や陥没した地域の伝説をひとつの塊に集めるといった方法は採用しないと決めた」<sup>63)</sup>と明瞭なグループ型配

列を避けた理由を述べている。これに対しゾンマー及びミュレンホッフの伝説集、また後続のヨーハン・ヴィルヘルム・ヴォルフ、フランツ・クサーファー・シェーンヴェルトらが内容基準配列を行った伝説集は何れもグループ型配列形式をとっており、連想型配列形式は見受けられない。<sup>64</sup>「【グループ型配列】を行うためには、編纂者が伝説の各話のある共通のテーマごとに分類し、それに小見出し(小テーマ)を付与する必要がある」<sup>65</sup>ため、伝説集編纂の時点で編者は既に個々の収録テキストについて一定の見解を有していたということになる。グリムが配慮したようにひとつの伝説が語るテーマはひとつではないのだが、グループ型配列を選択した際に編者は最適と思われるテーマに的を絞ってラベル付けを行う。即ち伝説集に「ツヴェルク伝説」ないし「コーボルト伝説」として収録されているテキストは、編者によって「ツヴェルク伝説」「コーボルト伝説」とラベル付けされたテキストなのである。

19世紀ドイツ語圏において主だった伝説集を刊行したのは研究者であり、伝説集は編者の想定する「伝説」観に基づいて編纂される。そこには編者の考える「フォルクの伝説とはこのような世界観の下に語られるものである」というイメージが表れている。各伝説集そのものがひとつの思想を表現した体系である。この体系、そしてその中におけるツヴェルク伝説の位置づけについて考察することは、従来ツヴェルク研究のような「フォルクのツヴェルク像」ではなく、研究者がフォルクの中に見出そうとしたツヴェルク像について明らかにする試みである。こちらの観点から見たツヴェルク像を補完することにより、知識人とフォルクとの相互作用の中で生成するツヴェルク像を立体的に捉えることが可能となるだろう。

(神戸大学国際文化学研究所博士課程後期課程)

## 注

<sup>1)</sup> Bernd Steinbauer: Art. Zwerg. In: Kurt Ranke (Hg.): *Enzyklopädie des Märchens. Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung*. Berlin (de Gruyter) Bd. 14 (1999). S. 1437-1445. Hier S. 1438.

<sup>2)</sup> 日本語の「こびと」には外来語としてのニュアンスの問題もある。開国以前の日本語の物語における「小人」と、明治期において『子どもと家庭のメルヘン』*Kinder- und Hausmärchen* (いわゆる『グリム童話集』)を和訳する中で模索された呼称「こびと」とは内実が異なることが指摘されている。但し、『グリム童話』の初期の邦訳は英訳版からの重訳であるため、正確にはツヴェルクでなく英語の *dwarf* の訳語であったと考えられる。池田美桜「明治期における〈こびと〉の意味するところのもの〜グリム童話の翻訳を中心に〜」『白百合女子大学児童文化研究センター論文集』第IV号、2000、1-15頁。野口芳子『グリム童話のメタファー：固定観念を覆す解釈』勁草書房2016、141-163頁。

<sup>3)</sup> アーカイブや話型カタログにおいては現在もなお分類の試行錯誤が繰り返されている。vgl. Vilmos Voigt: Art. Anordnungsprinzipien. In: Kurt Ranke (Hg.): *Enzyklopädie des Märchens. Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung*. Berlin (de Gruyter) Bd. 14 (1999), S. 220-227.

<sup>4)</sup> Hermann Bausinger: *Volkskunde. Von der Altertumsforschung zur Kulturanalyse*.

Unveränderter Nachdruck der Ausgabe 1971. Darmstadt (Carl Habel) 1987, S. 42. 強調は原文のイタリック体。

- <sup>5)</sup> vgl. Karl Wehrhan: Die Sage. In: *Handwörterbuch zur Volkskunde*. Leipzig (Heims) Bd. 1 (1908)
- <sup>6)</sup> Lutz Röhrich: Art. Geographisch-historische Methode. In: Kurt Ranke (Hg.): *Enzyklopädie des Märchens. Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung*. Berlin (de Gruyter) Bd. 5 (1987), S. 1012-1030.
- <sup>7)</sup> Ina-Maria Greverus: Die Geschenke des kleinen Volkes. KHM182 = AT503. Eine vergleichende Untersuchung. (Auszug aus einer Masch.-Diss. Vom 12. Mai 1956) In: *Fabula*. 1. Bd. 1958. Sonderheft S. 263-279.
- <sup>8)</sup> 竹原威滋「説話の一生とジャンル変遷—〈世界の瘤取り鬼〉(AT503)をめぐる—」『説話・伝承の脱領域 説話・伝承学会創立二十五周年記念論集』岩田書院 2008、451-475 頁。
- <sup>9)</sup> August Lütjens: *Der Zwerg in der deutschen Heldendichtung*. Breslau (G. Olms) 1911.
- <sup>10)</sup> Wendelin Marwede: *Die Zwergsagen in Deutschland nördlich des Mains*. Diss. Köln 1933.
- <sup>11)</sup> Hanni Hässler: *Zwerge und Riesen in Märchen und Sage*. Diss. Tübingen 1957.
- <sup>12)</sup> Claude Lecouteux: Zwerg und Verwandte. In: *Euphorion Zeitschrift für Literaturgeschichte*. Heidelberg 1981, Bd. 75, Sonderheft, S. 366-378.
- <sup>13)</sup> 宇川絵理「ドイツ語圏のツヴェルク伝承—異人的性格と媒介者としての役割」説話・伝承学会『説話伝承学』第4号、1996、53-68 頁。
- <sup>14)</sup> 宇川絵里「北部ドイツのツヴェルク伝承—〈絹糸に下がった命〉の話型—」松村國隆、金子元臣、三谷研爾編『中欧-その変奏』鳥影社 1998、206-225 頁。
- <sup>15)</sup> 大野寿子「グリム兄弟における〈小人〉像—メルヒェン、伝説そして神話をてがかりに—」東洋大学文学部日本文学文化学科『文学論藻』第84号、2010、53-81 頁。
- <sup>16)</sup> Duden Etymologie: *Herkunftswörterbuch der deutschen Sprache*. Mannheim (Duden) 1989, S. 71f.
- <sup>17)</sup> 田口武史『R. Z. ベッカーの民衆啓蒙運動—近代的フォルク像の源流—』鳥影社 2014。次の論文も参照のこと。川原美江「〈フォルク〉のいない文学—ヘルダーからグリム兄弟にいたる民衆文学の構築—」日本独文学会『ドイツ文学』第148号、2013、140-157 頁。
- <sup>18)</sup> 河野真『ドイツ民俗学とナチズム』創土社 2005。
- <sup>19)</sup> 英語の「フォーク」folk と日本民俗学の用語「常民」にも同様の問題はあるが、ドイツ語のフォルクに比べ民衆の意味における問題の方が大きく取り沙汰されている。アラン・ダンデス他(荒木博之編訳)『フォークロアの理論』法政大学出版局 1994、1-11 頁。
- <sup>20)</sup> ジャック・ザイプス(鈴木晶訳)『グリム兄弟 魔法の森から現代の世界へ』筑摩書房 1991、21-28 頁。
- <sup>21)</sup> 田口前掲書、187 頁。
- <sup>22)</sup> 田口前掲書、184-191 頁。
- <sup>23)</sup> ここでの「伝説」はメルヒェンや笑い話と対比されるジャンルとしての伝説ではなく、伝承文学全般を指す広義の「伝説」である。次のグリムの引用においてもこちらの意味で用いられている。「伝説」というドイツ語の単語にはジャンル名としての用法と伝承文学全体を指す用法とが混在している。
- <sup>24)</sup> Brüder Grimm (ediert und kommentiert von Heinz Rölleke): *Deutsche Sagen*. Ausgabe auf der Grundlage der ersten Auflage. Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker Verlag) 1994, S. 15.
- <sup>25)</sup> 西尾光一『説話文学小考』教育出版 1985、61 頁。尚、国文学における「説話」はドイツ文学における広義の「伝説」に該当するが、仏教説話を連想させ、日本独自の文化的文脈を背負った用語であるため本稿では用いない。
- <sup>26)</sup> 西尾前掲書、62 頁。
- <sup>27)</sup> 引用は頁数ではなく伝説に付された番号を DS の後に記すこととする。なおグリム兄弟の没後に刊行された第3版以降は DS70 の追加によって番号がずれているが、本稿において使用した番号は全て初版のものである。

- 28) Brüder Grimm, a. a. O. S. 17f.
- 29) Philipp von Steinau (=Ferdinand Philipp Grimm): *Volkssagen der Deutschen*. Zeitz 1838. S. III.
- 30) 植朗子『『ドイツ伝説集』のコスモロジー—配列・エレメント・モチーフ—』鳥影社 2013、16-46 頁。
- 31) Brüder Grimm, a. a. O. S. 55f.
- 32) Brüder Grimm, a. a. O. S. 58.
- 33) Brüder Grimm, a. a. O. S. 102f.
- 34) 大野 2010、76 頁。
- 35) グリム兄弟の『ドイツ伝説集』から明らかな影響の見受けられる伝説集は作家 H. シュタールによって 1831 年に既に刊行されているが、シュタールがグリムから直接の指導を受けた事実は確認できず学派の研究者とは断定できないため本稿では分析対象から外している。vgl. H. Stahl (=Jodocus Teodosius Hubertus Temme): *Westphälische Sagen und Geschichten*. 2. Bde. Elberfeld (Büschler) 1831.
- 36) 高橋健二『グリム兄弟・童話と生涯』小学館 1984、243-249 頁。
- 37) Kathrin Pöge-Alder: Art. Mythologische Schule. In: Kurt Ranke (Hg.) *Enzyklopädie des Märchens. Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung*. Berlin (de Gruyter) Bd. 9 (1999) S. 1086ff.
- 38) 河野 2005、639 頁。
- 39) たとえばマンハルトの系譜は過剰に想像力を働かせた解釈によって後に人類学や民俗学などの立場から批判を受けている。河野 2005、525-541 頁。横道誠「〈マンハルト派の理論〉についての史的批判的記述—ドイツ神話学派（ヤーコプ・グリム、ヴィルヘルム・マンハルト）の学問的系譜と J. G. フレイザー、ケンブリッジ典礼学派、文学的モダニズムの著作におけるその受容—」『京都府立大学学術報告』第 67 号、2015、31-76 頁。
- 40) Pöge-Alder 1999, S. 1086ff.
- 41) 平藤喜久子「神話学の〈発生〉をめぐって—学説史という神話—」井田太郎・藤巻和宏編『近代学問の起源と編成』勉誠出版 2014、133-150 頁。
- 42) ここでの「伝説」はメルヒェンと対置される形で伝承文学におけるジャンルのひとつを指す。注 23 を参照。
- 43) Jacob Grimm: *Deutsche Mythologie*. Wiesbaden (Marixverlag) 2007, S. 346-398.
- 44) 『デーモンと精霊の小辞典』によると、ヴィヒトとは「ツヴェルクの、また一部地域においてはコーボルトの別名」である。Leander Petzoldt: *Kleines Lexikon der Dämonen und Elementargeister*. München (C. H. Beck) 1995, S. 184.
- 45) Jacob Grimm, a. a. O. S. 344-345.
- 46) Jacob Grimm, a. a. O. S. 347.
- 47) Jacob Grimm, a. a. O. S. 348f.
- 48) Emil Sommer: *Sagen, Märchen und Gebräuche aus Sachsen und Thüringen*. Halle 1846. S.25.
- 49) Sommer, a. a. O. S. 170.
- 50) Ebd.
- 51) Adalbert Kuhn: *Märkische Sagen und Märchen. Nebst einem Anhang von Gebräuchen und Aberglauben*. Berlin 1843, S. IX.
- 52) Sommer, a. a. O. S. 171.
- 53) Jacob Grimm, a. a. O. S. 386.
- 54) 伝説集刊行当時のミュレンホッフはキール大学で教鞭を取っていたが、1854 年からはヤーコプ・グリムの後任者としてプロイセンのベルリン大学に移る。マンハルトはベルリン大学におけるミュレンホッフの門下生である。Wilhelm Scherer: Art. Müllenhoff, Karl. In: *Allgemeine deutsche Biographie*. Berlin (Duncker u. Humboldt) 1967-1971, Bd. 22. 河野 2005、529 頁。
- 55) Karl Müllenhoff: *Sagen, Märchen und Lieder der Herzogtümer Schleswig, Holstein und Lauenburg*. Kiel 1845.
- 56) Müllenhoff, a. a. O. S. 620.

- 57) Müllenhoff, a. a. O. S. 279f.  
58) Müllenhoff, a. a. O. S. 285f. 「蹄」Huf は「農場」Hof の誤植と思われる。  
59) Müllenhoff, a. a. O. S. 284.  
60) Müllenhoff, a. a. O. S. 286.  
61) Brüder Grimm, a. a. O. S. 73ff.  
62) Petzoldt, a. a. O. S. 175.  
63) Brüder Grimm, a. a. O. S. 19.  
64) vgl. z. B. Johann Wilhelm Wolf: *Hessische Sagen*. Leipzig (Vogel), Göttingen (Dieterichs) 1853. Franz Xaver von Schönwerth: *Aus der Oberpfalz. Sitten und Sagen*. 3 Bde. Augsburg (M. Rieger) 1857-1859.  
65) 植 2013、17 頁。